

道徳的理想としてのケアリング

岩倉 孝明¹⁾

要 旨

本稿では、現代さまざまな形で注目を集めるケアリングの倫理について、特にノディングズ、メイヤロフ、ローチ等の理論に沿いながら、その背景や基本的な考え方を考察した。またケアリング倫理への批判についてもごく簡単に検討した。ケアリング倫理の理論は、自己が他者（相手）と結ぶ真の関係性のあり方を分析し、その実現を倫理の観点から説くものである。このような倫理的ケアリングはケアしたいという自然なケアリングの心情から生じ、この心情を根底におきつつそれを倫理化したものである。ケアリング倫理の理論の眼目は、人間のケアする能力が通常有限であることを認識しつつも、ケアする自己を理想として保つことで、ケアリング倫理の実現を図ろうとするところにある。

キーワード：ケアリング、倫理、理想、関係性

1. ケアリングと倫理

ケアリングは今日なぜ強調されるのだろうか？ シモーヌ・ローチは、この問題について、「私たちの社会は危機にある社会である¹⁾」としながら、次のように述べている。

「おそらく今日の危機のもつ最も重大な特徴の一つは、現在普及している倫理が個人や公共のふるまいにとって頼りになるような規範を供給できないことである。私たちが現代の技術革新がもたらした事態に直面するとき、こうした状況が特に厳しい問題として意識させられる。すでに達成された発展、もしくはそれほど遠くはない将来に予想される発展に脅かされながら、私たちは道徳上の道しるべを探し求めているのである。ハンス・ジョーナスが述べるように、『およそ全能でありながら完全な無力さを伴い、最大限の能力を持ちながらそれを何に向けてよいのかわからない状態の中で、私たちはむき出しのニヒリズムに身を震わせているのである。』²⁾」

この文章は、今日ケアリングが倫理の基礎として説かれる事情を簡潔に語っている。今日私たちの行

動の自由の範囲は飛躍的に広がっているのに、しかし人は何をなすべきなのかという点について、信頼できる規準をもっていないということである。

ここでいう「何をなすべきか」とは、たとえば複数の人間の間の権利の衝突の調整に関連するような問題ではない。むしろそうした問題以前に、人は何をなすべきかについての導き或いは価値規準となるものが、現代においてはまず欠けているのではないか、という問題である。文脈は異なるが、「…私に欠けているのは、私は何をなすべきか、ということについて私自身に決断がつかないでいることなのだ³⁾」というキルケゴールの言葉は、現代社会全体の問題へと拡張すれば、ここでいわれている問題にある程度重なってくる。つまり人はどんな行為を欲すべきなのか、即ちどんな行為を意味ある行為と見なすべきなのかということである。

では私たちは、自分を動機づけるべき価値の規準を、どのようにして求めたらよいだろうか。価値ないし意味のある行為とはどんな内容のものか。それは人間としてふさわしいあり方にかなうような行為である。では次にどんなあり方が人間にふさわしいあり方なのか。ケアリングの理論家によれば、それは「ケアすること」なのである。ローチの考え方によれば、「ケアすること」が「人間であること」、すなわち「人間の存在様式⁴⁾」にほかならない。

1) 川崎市立看護短期大学

とはいっても、もちろんこれは、現実人間が四六時中ケアしようと努めているということではないし、またケアリングの試みが常に十分に成功しているということでもないであろう。むしろ、人間はケアすることを人間にふさわしいあり方として、自分の行為を動機付け、またその評価の尺度となる人間的行為の理想とすべきことを述べたものと、考えてよいであろう⁵⁾。

一方ノディングズは、多くの人がもつであろう内的体験に、ケアリングの倫理の源泉を求めている。彼女によれば、ケアリングの倫理が導かれるには、2つの心情(feeling)を必要とする。第一の心情は、「自然なケアリング」(natural caring)の心情であり、自分がそうしたいからという理由で他人のために行為する(たとえ母親がこどものためにケアをする)という、自然にわき起こる心情である。第二の心情は、この第一の心情を思い起こし、その感情を受け入れ保とうとする自分を自分自身の最善の姿として気づかうことに反応して生ずる心情である。この第二の心情から私は、「私はしなければならない」(I must)と感じ、それに沿って行為する。これが「倫理的なケアリング」(ethical caring)の心情である⁶⁾。

「ケアリングに基づいて構築される倫理はケアする態度を維持しようと努力するのであり、したがって自然なケアリングに依存しているのであって、それを越えてはいない。だから、倫理的な行動の源泉は、一対の感情(sentiments)―直接に他者(the other 相手)を気づかう感情と、最初の感情を拒否するよりはむしろ受け入れ維持するであろう最善の自己を気づかい思いやる(feel for and with)感情のうちにある。⁷⁾」

このような倫理的なケアリングの感情は、あくまで欲求のうちに根を持つものであり、いわゆる道徳的・倫理的な義務とは異なることを、ノディングズは以下のように強調する。

「私はこの子を愛するがゆえに、この子と絆で結ばれているがゆえに、私自身の苦痛であったらそう欲するであろうように、この子の苦痛を取り除きたいのだ。この『私はしなければならない』(I must)は、義務的な命法ではなく、『私はしたい』

(I want)に伴う命法である。たとえば私が椅子に縛りつけられていて、自由になりたいと必死に欲するなら、私はもがきながら言うだろう、『私は何とかしなければならない。この縛めを解かなければならない』と。この『しなければならない』は、まだ道徳的なし倫理的な『すべきである』(ought)ではない。それは欲求から生まれた『しなければならない』(must)である。⁸⁾」

論者により個人的な内的意識に訴えるかどうかの違いはあるが、いずれにせよ、人間(殊に女性)が自己にとって、理想的であると感じられる人間のあり方をケアリングととらえ、それを規準として行為の価値ないし意味を判断するという考え方であるといえるだろう。

しかしケアするとはそもそもどんなことであろうか。それはもっとも一般的にいえば、人間はもちろんのこと、その他の生命、あるいは観念などの抽象的存在までも含めて、世界にあるさまざまな事物との真の関係をもつということであろう⁹⁾。この場合、世界内の人間や事物との関係とは、空間的な近さなどの物理的関係ではなく、むしろ精神的な近しさ・親しさの問題であると考えられる。ローチは実際に、ケアするとは「世界内存在」の同義語だと述べている¹⁰⁾。

2. ケアリングの要素

このような人間・事物との親しい関係は、単に人間や事物を傍観者的に眺め、また他人からもそのように眺められていることから生じて来ない。それはまさに人間や事物(つまり他者)に対してケアという関わりをもつこと、つまり人間に固有な「出会い」をもつことである。このようなケアリングの特徴は、しばしば引かれるメイヤロフの規定にしたがえば以下のようなものである。

「他者が成長することを助けることとしてのケアを行うとき、私は、自分がケアするもの(人格、理想、観念)を、私自身の延長として経験する。またそれと同時に、それ自身の権利において私が尊重し、私とは別であるような或るものとして、それを経験するのである。¹¹⁾」

「ケアする際の他者との合一（unity）が、寄生的関係にみられる合一と異なっている点がもう一つある。他者を支配したり所有したりしようとせず、私はそれが、それ自身の権利において成長すること、あるいはときに言われるように、“それ自身になる”ことを欲しているのである。¹²⁾」

「そればかりでなく、私は、他者を成長のために自分を必要としているものとして経験するのである。ある人によって、またある主義やある理想によって、自分が必要とされていると私たちが感じることがあることを、考えてほしい。¹³⁾」

「専心（devotion）は、友情の不可分の一部であるのと全く同じように、ケアにとって本質的なものである。私は他者に、そしてほとんど予見できない未来に関与する。〔…〕ある期間の幅をもって見た場合、専心は私の首尾一貫性によって示される。首尾一貫性とは、不利な条件のもとでも屈しないことや、困難を進んで克服しようとするなどのことである。¹⁴⁾」

「さて以上が、他者が成長するのを援助することとして理解されたケアの基本的なパターンである。すなわち、私は他者を自分自身の延長として、また私から独立したものとして、成長する欲求をもつものとして経験する。私は、他者の発展を自分の幸福感と結びついているものとして経験する。そして、私自身がそのような成長のために必要とされていることを感じる。私は肯定的に応答し、他者の成長の方向に導かれて他者の必要に専心する。¹⁵⁾」

以上から、ケアリングとは、相手が固有の権利において成長するのを援助することであり、その際には、相手に対する専心が起こるが、それは相手の独立性を認めつつ相手と一体化するという不即不離の関係である。そしてこのようにして相手が自分を必要としているという感情が同時に、自分自身に幸福感をもたらす。このようなケアリングの主な構成要素としてメイヤロフは、知識、リズムを変えること、忍耐、正直、信頼、謙遜、希望、勇気を挙げているが¹⁶⁾、その詳細についてはここでは立ち入らないことにしよう。

このようなケアリングは、たしかに目に見える行いを伴うのが普通だが、しかし目に見える行いを目印にして、ケアリングの有無を確認することはできない。ノディングズのいうように、ケアリングの存在を確認するには、「観察できる行いを超えて、関与という行為（acts of commitment）に目を向けねばならない」のであり、そうした行為は、「それを実際に遂行している個々の主体によってのみ、見られる」行為である¹⁷⁾。

ともかくローチのいう「世界内存在」の内実は、結局このような特徴をもったケアの関係を通じて世界が私にとって親しいものとなり、そのうちに自分の「居場所」を見いだすことだといえよう。また人は、このケアの関係を通じて自分が何者であるか、あるいは人間であることの意味を、理解することができる。ブーバーが『我と汝』において語るように、人間においては「初めに関係ありき」なのである。ケアする人は、相手との関係のうちで、いかに行為すべきかを考える。その関係のうちにある人々の間の関係において、最善の選択をなすことを考える。

3. ケアリングに対する批判

さてメイヤロフのケアの定義において、注目すべき点として、「専心」と「相手の成長を助けること」とがあると思われる。ケアリングの本質を考える上で、キーポイントと思われるので、これに対する批判を手がかりとしながら少し考えてみたい。

1) 「専心」をめぐる疑念に対して

ケア相手への「専心」とは、要するに対象に関心を集中することである。その場合、自己自身への関心からの離脱という側面と、自分以外のもののうちでもケア相手以外のものへ関心をそらさないという意味の両方がこめられていると言えよう。

自己放棄に関する問題

ケアリングは一種の自己放棄という性格をもっている。その背景には、近代的自我の閉塞状況があるといえる。ローチのいうように、人間は自己の周りをグルグルと回り続けて、他人の関心や視線や生命の内に入り込むことができないのである¹⁸⁾。要するに自己の圏域から外に出ることができないという状況である。（西欧哲学では、すでに400年も前、

デカルト的な世界を対象として自己に対置する自我において、すでに世界と自我との疎遠な関係が意識されていたと考えられ、さらに18世紀末のカントは、外界の存在を証明できないことは哲学にとってのスキャンダルだといっている。) ケアリングが強調される背景には、いうまでもなく、こうした状況を打開し個人を自己閉塞的な状況から解放しようという意図がある。

しかしまさにその点に批判が向けられることがある。ローチの指摘する通り、ケアリングと自己実現とを対立的に考える立場である。果たして自己実現とケアの尊重とは、矛盾するであろうか。

たしかにケアリングは、一種の自己放棄であり、関心の向きを遠心的に向け変えることである。しかしそれは、自己閉塞性の放棄ではあっても、ある特殊な意味での自己中心性を帯びているとも考えられる。ベナーはケアリングを扱った主著の冒頭でこう注意する。

「本書で用いる気遣い (caring) という語は、人が何らかの出来事や他者、計画、物事を大事に思うということの意味する。自分にとっての重要度という面から見て、内部に濃淡差のある世界、つまり非常に重要な事柄とそうでない事柄、まったくどうでもよい事柄がそのなかに区別される、そういった世界に住むのが人間という存在だとすれば、その根本条件をなすのが気遣いである。¹⁹⁾」

もしこの通りであるとすれば、ケアしつつ生きる人間にとって、世界内の人間や事物は、自己の関心という点から重要度の濃淡に従って、遠近法的に広がる世界なのである。自己は、それ自身は「専心」を通じて空白化するにしても、こうした関心を統括する虚焦点として、重要な意味を持つことは明らかである。実際、自己がケアリングに際して自己放棄が可能であり、また相手から自分が必要とされているという感情を持ちうるのも、こうして世界が自己の関心を通じて濃淡差をもって立ち現れてくるからであろう。このような意味でケアリングは、自己の中心的位置を特殊な意味で保っており、自己実現と対立するものではないと考えられる。

だが逆にいえばまさにその点を問題にすることもできる。こうしたケアリングの「隠れた自己中心性」によって、ケアする者の行為は「公正さ」を保ち得

ないのではないだろうか。これはいわゆる「公正(正義)の倫理」と「ケアの倫理」は両立しうるかという問題につながる。

万人あるいは森羅万象に向けられた(あるいはそこまでゆかなくても) 普遍的なケアは、私たちにとって可能であろうか。そのような天分をもって生まれた人々、たとえばマザー・テレサのような人には可能であるかもしれない。しかし少なくとも多くの人にとって困難であることは確かであろう。

ノディングズは、「個々人のケアの能力の大きさは、現実には限られている」とし、「どんなひとでもケアできるわけではない——おのおのの人間がどんな人でもケアすべきだという考えは、なるほど美しくはあっても危険な夢だ」といっている。また彼女は、倫理的判断の規準と通常見なされてきた「普遍化可能性」(universifiability) の原理を拒絶するという²⁰⁾。

こうして公正の倫理とケアの倫理を対立的に並べるのは、私見によれば、誤解を招きやすい仕方のように思われる。しかし今この問題にはこれ以上立ち入らないことにしたい。

専心している他者にのみ関心を集中し、他の対象に関心をそらさないことがケアの大切な特徴の一つであろう。後者のような態度は、ケア相手を、ある類に属する事例として見るということになりやすい。特に高度化された形では科学となる私たちの経験的認識の仕方は、主に概念と法則化といった概括の方法によっている。確かに概念化と法則化の過程に労苦はあっても、一旦それらが確認されれば、私たちの思考の労力は大幅に省かれ、また行為における物理的、精神的エネルギーも軽減されるといえる。じっさいにそうした概括化を完全に放棄することは不可能だし、必要もないだろう。

しかしポイントは、類の成員として見る「だけ」では不十分だということである。たとえば、「c という条件(属性・状況)が真であるような人の全てについて、a という行為をなすべきである」という命題(規則)を考えてみよう。たとえば太郎という人に対する倫理的な行為において、この規則が問題になるとする。その場合、人はまず太郎が条件cに当てはまるかどうかを考え、この規則の適用が正当かどうかを判断する。しかしその場合、倫理的な意味を持っているのは、この命題自体であって、この

規則の適用される対象ではないのである。太郎がcをかなえた対象であるかどうかは、事実判断の問題であって、倫理的問題には属さない。カントが、私たちは道徳法則に意識を向けるべきであって、そこに入りうるあれこれの対象の差異は重要ではないと考えたのもその意味であると言えよう。

ここでもやはり現れているのは、前項と同じくケアと公正さの関係という問題である。ここでは次の点だけ強調しておきたい。ケアリングの倫理のポイントは、自己閉塞の打開と他者との関係の問題である。一般的な規則を通じての対象との関わりは、間接的なものにすぎない。というよりも今述べたように、じつは一般的な規則の適用を考えると、対象が問題ではなく、自分の精神の内にある規則そのものの真理性に、私たちのまなざしは向かっているのだといえる。こうした行為では、人は自己から外へ出て対象に関係をもっているとは言い難い。だからこそあらかじめ用意された規則の適用だけでは不十分であり、それに加えてケアリングが必要なのである。

以上の考察を通じて、ケアリングを構成する「専心」という特徴について、それが必ずしも没自己的（あるいは自己犠牲的）行為ではないかという批判は当たらないこと、また、ケアリングの対象はかけがえのない個として「も」扱われるべきであるということ、ひとまず確認できたのではないかと考える。

2) 「相手の成長を助ける」という特徴について

「専心」という特徴は、自己が自己の中心性と閉塞せず他者へと関わることを意味したが、しかしこれだけではまだ漠然としている。その内容を「相手の成長を助ける」こととして限定することで、ケアリング理論の意図するところがより明確になってくる。

ケアすることが「相手の成長を助ける」ことであるというのは、ケアがケアするものとされるものの間に、「依存」の関係、つまり依存する者と依存される者との関係を生じることを意味する²¹⁾。しかしこのことは、自主独立、つまり自律と自己決定を第一とする現代の人間観にとっては、進んで受け入れたいとは思わないような関係であろう。しかしケアリングの理論の意図の一部は、この近代人がとか

く避けがちであった依存の関係を人間が人間としてあるために不可欠のものとして、認めるということにあると言える。これについてローチは次のように述べている。

「ケアリングあるいはケアリングという行為は、人間存在のひとつの基本的な特性、依存という自己超越的な特性への反応である。依存という言葉は、人間存在としての私たちが、自分以外のひとの努力によって存在するという事実を表している。私たちの存在は、他者のケアに負っているばかりでなく、両親や親戚や社会全体から受け取る愛情と保護によって今あるものとなっているのである。ケアは依存との弁証法的な関係にある。²²⁾」

依存はケアと対立するものだが、また一体不可分のものでもある。ケアが行われるとき、自己を超えて相手に関係するという働きは、ケアする者からされるものへの方向だけでなく、ケアされるもの（依存者）からケアするものへの方向にも起こるのである。

さらにこの依存関係は、表面に現れた行為だけを見ると、通常は非対称なものであろう。つまりケアは常に相互的である保証はなく、ケアする側とされる側とに分かれるのがふつうである。ここからケアする行為の自己犠牲的性格をここにも見いだそうとする人があるかも知れない。しかしノディングズは、この非対称性は実は見かけのものにすぎないとしている。

「明らかに、ケアされる人はケアする人に依存している。しかし、奇妙なことだが、ケアする人もまたケアされる人に依存している。[...] 私たちは各々、ケアする道徳的な関係の中で他者〔相手〕に依存している。だから、わたしが探し求めている正にその善さ、言い換えれば倫理的な自己の完成は、部分的にはあなた、つまり他者に依存しているのである。²³⁾」

ケアそのものがケアされる者の存在に依存しているというのは、重要な指摘であろう。ケアする者は自己犠牲を払っていると考えする必要はない（つまりケアリングの倫理は「自己犠牲的愛他主義」(agapism)ではない²⁴⁾。ただし、そうしたケアの姿

勢をどこまで保ちうるかは、ケアリングの倫理的理想にその人がどこまで強く関与しているにかかっているともノディングズは、注意している。

4. 看護におけるケアリング倫理の意義

「何をすべきか」とは、かなり幅の広い意味をもった表現である。これは義務の命題でもありうるが、また「どんな行為が価値ある行為なのか」という意味にもなりうる。前者は強制的性格をもつが、後者は私たちの生き方と行為とに動機を与え、意味づけ評価することを可能にしてくれる。ケアリングの理論は、この後者の問いに対する一つの答えであると考えられると先に述べた。

以上を踏まえつつ、看護とケアリングの関係について考えてみたい。ケアリングが最も重要なテーマになっているのは、いうまでもなく看護の領域である。かつて科学主義の影響で、ケアリングは片隅に追いやられたかに見えた時代があった²⁵⁾。しかし現在、科学万能医療の限界も明らかになるにつれて、再びケアリングが看護の本質をなすものという再認識が普及し、それをめぐり多くの議論がなされているのは周知のとおりである。

しかし看護におけるケアリングの倫理の意義については、懐疑的な立場も存在する。ヘルガ・クーゼの議論はその代表的なものであろう。主立った論点を挙げてみよう。クーゼはまず「ケアリング」には、心配・気遣い・専心などの情緒的意味と、患者に対して具体的におこなう「世話」の二つの意味があり、ケアの看護理論を作り上げようとする試みの中心になるのは、第一の意味のケアリングであることを確認する。しかしこのようなケアリングに基づく看護倫理の試みをクーゼは批判する。

- 1) ブーバーの語る「我－汝」の関係にみられる、特別な瞬間（人が愛し合うときのような）は確かにあり得るが、しかしほとんどの人間関係はもっと平凡なものである。だから看護婦－患者関係が「我－汝」の性質を持つべきだというのは、非現実的である²⁶⁾。
- 2) 看護婦が世話をする対象である患者の側が、本当にそのような気高い理想を望んでいるのか、確認されていない²⁷⁾。
- 3) ケア（気づかうこと）のすべてが、倫理的に善であるとはいえない。その善悪の規準を（ノデ

ィングズの）ケア理論は示しておらず、看護婦と患者との関係においても、看護婦は患者のどういう点についてケアすべきなのか（たとえば患者の医療上の利益か、道徳的権利かといったこと）という問題が考慮されていない²⁸⁾。

- 4) さらに、そもそもどうして人間関係に根ざしたケアが倫理の基礎とされるべきなのか、その理由が示されていない²⁹⁾。

徹底した批判であり傾聴すべき指摘もある。しかし全体としてはケアリング理論の意図についての誤解を含んでいるように、私には思われる。

その理由は、クーゼ自身が引用しているジーン・ワトソンの言葉に、はっきりと語られている。

「看護やケアリングを考える場合、私たちは、一般的な倫理的原則や法による正当化にはあまり関心がない……私たちは、ケアリングとはある目的に人を積極的に関わらせていくような道徳的理想像であると考えている。その目的は、人間の尊厳を守り高めることであり、人間性を維持することである……ケアすることとキュア（治療）することを道徳としてとらえる倫理が訴えるのは、主観的な思考を優先させる看護倫理である。³⁰⁾」

すでに確認したように、ケアリング理論は、その理論の通りに現実が進行しているとも、また進行することが可能だともいってはいない。それは、実際の人間行動を受動的に分析・記述したものというよりも、むしろ本質的には、人間の行為の理想ないし目標を述べたものという性格が強い。今引いたワトソンの言葉がこのことを率直に語っている。ケアリングとは、人がかくありたいと思うべき「道徳的理想像」である。そしてそうした看護倫理は主観的思考を優先させる。つまりケアリングに基づく看護倫理にとって、看護婦と看護婦が関わるべき人間の道徳的理想像を提示することが、客観的な分析に優先する課題である。こうした理想の意義は、看護婦の実践に対して、それを導き形成するという創造的な機能を持つことであるといってもよからう。

クーゼの批判を逐一検討することはここでは避けるが、全体としてケアリングを人間存在の現実そのものを語るもののように考えることからくる誤解を

伴っているように思える。

結びにかえて

ことによると私たちが忘れかけているのかもしれない「理想」の働きが、ノディングズらが念頭に置く教育の場面、また医療者にとっても大切な働きをもっていることを、ケアリングの理論から感じとることができる。医療者は、医療とは何かという問いを自問することがあるかもしれない。またさまざま

な論者のケアリング理論をみると、技術的な熟練だけではなく、医療者の実践を導く「医療の理念」とそれを基に各自が組み立ててゆく医療実践や医療者のイメージといったものが医療の内容に対して無視できない力をもつことが理解される。

以上素描的な議論であったが、今後、道徳的理想とケアリングの意義について、さらに考えてみたいと思う。

註

引用文中の〔 〕内は筆者の補足である。

- 1) シモース・ローチ『アクト・オブ・ケアリング』（ゆみる出版、1996年）、162頁。
- 2) ローチ、160頁。
- 3) 『キルケゴール』（世界の名著51）（中央公論社、1979年）、21頁。
- 4) ローチ、15頁。
- 5) Cf. Noddings, Nel, *Caring ; a feminine approach to ethics and moral education*, (Berkeley and Los Angeles, California and London, England, 1984), ch. 5.
- 6) Noddings (1984), pp.79-81.
- 7) Noddings (1984), p.80.
- 8) Noddings (1984), p.82-3.
- 9) ノディングズはこれを、「美的ケアリング」(aestheical caring) と呼ぶ。(Noddings (1984), p.21.)
- 10) ローチ、21頁。
- 11) Mayeroff, Milton, *On Caring*, (New York, 1990 (初版 1972)), p. 7.
- 12) Mayeroff, p. 8.
- 13) Mayeroff, p. 8.
- 14) Mayeroff, p.10-11.
- 15) Mayeroff, p.11-12.
- 16) Mayeroff, p.19-35.
- 17) Noddings (1984), p.10.
- 18) ローチ、64頁。
- 19) ベナー／ルーベル『現象学的人間論と看護』（医学書院、1999年）、1頁。
- 20) Noddings (1984), p. 5, 84-85.
- 21) Noddings (1984), p. 6. また森村修『ケアの倫理』（大修館書店、2000年）、186頁以下。
- 22) ローチ、90頁。
- 23) Noddings (1984), p.48.
- 24) Noddings (1984), p.28.
- 25) レイニンガー『看護論－文化ケアの多様性と普遍性』（医学書院、1995年）、10-11頁。
- 26) ヘルガ・クーゼ『ケアリング－看護婦・女性・倫理』（メディカ出版、1997年）、188頁。
- 27) クーゼ、189頁。
- 28) クーゼ、194頁。
- 29) クーゼ、195頁。
- 30) クーゼ、186頁。